
人生《ストーリー》は終わらないっ！ 1

ひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーリー

人生は終わらないっ！

1

【Nコード】

N8080Y

【作者名】

ひなた

【あらすじ】

ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた。

漢字テストの裏の序章

ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた。ぼくはそのネコに『ハク』という名前をつけた。初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛が、あんまりにもキレイだったからだ。ハクは、すばしっこそうなスラリとした体に、いたずらっ子みたいなキラキラしたひとみをしていた。ぼくはハクの身の軽さや、ひとみのががやきにとてもおどろいた。でも、ぼくが一番おどろいたのは、ハクの毛並みの白さでも、すばしっこさも、ひとみのキラメキでもない。ハクは人の言葉をしゃべるネコだったのだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す(1)

「これは何だ……？ ……ああ、数学のノートか。これはもう見たくないな。廃品回収行き……つと」

オレは手にしたノートをポイと放り投げた。くたびれた数学のノートは、緩い放物線を描いて部屋の隅に無事に着地した。

オレはノートの着地を見届け、小さくガッツポーズをした。よし、狙い通りだ。

「さて、次は……ん？ これは世界史のプリントか。……もうグシヤグシヤだな。これは廃品回収より……燃えるごみにした方が楽かな」

そうつぶやきながら机の横のゴミ袋を引き寄せて、世界史プリントを束ごと突っ込んだ。プリントは情けない音を立てて潰れる。こんなの先生が見たら泣くだろうなあ。先生が苦勞して作った3年間の授業プリントも、ゴミ袋の中じゃ惨めなもんだ。

「許せ、先生。オレの部屋の美化のためだ」

オレは慰めるように、ゴミ袋を2、3度叩いた。

「えーと次は……」

その時だ。オレの背後のドアが派手な音とともに、吹っ飛びそうな勢いで開かれた。このドアの開け方は——ああ、アイツがおいでなさったか。

「ちよつと、海人^{カイト}！ 何をさっきからブツブツブツ！ うるさいわよ！」

女性特有のキンキンする高い声。いつものことながら、耳に突き刺さりそうなこの声は慣れない。オレはげんなりとドアの方に目を向ける。そこには仁王立ちになった大柄な女性のシルエットが1つ。まさに予想通り。オレは小さくため息をついた。

「ねーちゃん、勝手にオレの部屋に来るなよ」

そこにいるのはオレのねーちゃん——玉村^{たまむら} 美波^{みなみ}。

幼いころからオレ達姉弟は、いろんな人に「姉弟なのに、全然似てないのね」って言われてきた。……うん。オレもそう思うよ。

小柄でひよろいオレと違って、ねーちゃんは背が高く大柄で、いつも声大きい。なんでも、この体格と声で、学生時代はバレーボール部で重宝される選手だったそうだ。くりっとした大きな瞳をキラキラさせながら（オレがうんざりするぐらい）ねーちゃんは語った。

オレ達の唯一の共通点は、サラサラストレートの黒髪だけ。でも、それはもう過去の話。社会人になった今のねーちゃんの髪は、緩いウェーブのかかった茶色のショートヘアに変わってるから。

オレは18年間で1度も変わってない黒髪頭を掻いた。さて、どーやってねーちゃんに退出してもらおうか。

どうやら今、ねーちゃんのご機嫌はあまりよろしくないらしい。ねーちゃんのくりっとした瞳が、きゅっと細くなってつり上がっている。よくない前触れ。おい、ねーちゃん。いつも「もっとパツチリした目がいい」ってグチってるじゃん。そんな目、やめた方がいいと思うよ。

でも、健気な弟の無言のアドバイスは届かなかった。

「で？　どれぐらい片付いたのよ？」

ねーちゃんは細くつり上がった瞳で、オレの部屋をずっと見回した。一瞬、カチンとくるものがあつたが、オレは1つため息をついて我慢することにした。こんな眼をした時のねーちゃんを阻止して、よかった例ためしがない。オレは学習する子なのだ。

部屋の状態は一言で例えるなら、……足の踏み場もないってところだろうか。

床の上には、教科書の塔やマンガのタワーが、そこかしこに建築されている。今にも崩れそうな危うい状態だ。誰だよ、こんな危ないものを建てたのは？　……あ、オレか。

ベッドの上には洗濯物がこんもりとした山を作っている。本来ならクローゼットに仕舞われるべきものののだが、どうにも面倒くさいのだ。

勉強机の上は、ペンやらプリントやらファイルやらでいっぱいだ。ちよつとでもつついたら、あつという間に崩れてしまいうさだ。こんな状態でも崩れてないのが不思議だよな。まるで表面張力でも働いてるみたいだ。

「うーん、汚いままね。全然片付いてないわね」

ねーちゃんの言うように、全然片付いてない。………むしろ余計に汚くなったかな？　しかし、ねーちゃんの前でそれを認めるのは癪だ。^{しゃく}

「しょうがないだろ。部屋の掃除と、荷物の整理と、下宿用の荷づくりと、いっぺんにしてるんだから……」

「あーもう！　ボソボソ言わない！　独り言多すぎ！　部屋の片づけぐらい静かにできないの？」

「それ、もう聞き飽きた。オレの独り言はクセなんだよ」

とりあえず、ねーちゃんはもうほつとこう。片づけ再開、再開。手近にあった生物の教科書を、数学のノートのそばに放り投げる。

「そんな調子でほんとに片付くの？　3日後には下宿先に引越すんでしょ？」

「あーもう、うっさいなあ……」

「ってか、海人。これから1人暮らしなのに、ホントにやってけるの？　自分の部屋でさえこんな状態でさ」

「だから今片づけてるじゃんか。もう出て行って」

「……ハイハイ」

ねーちゃんは呆れたように言う、部屋から出て行った。

やっと静かになった。オレは安堵のため息をついた。

「ちよつと休憩……」

オレは荒れきった部屋のフローリングにゴロンと横たわる。ねーちゃんの相手は疲れるのだ。

天井に反射するほのかに暖かい日の光が、静かになったオレの部屋をやわらかく照らし出している。窓の隙間から、庭の草花のかすかな匂いがする。窓の外は春爛漫ってところなんだろう。

そういえば、今朝のニュースのお天気おねーさんが『今日は絶好のお花見日和のお天気です』って言ってたな。

「――っても、今年の春休みはそんな暇ないけどな……」

ほんの2、3年前の春休みは友達とダラダラ過ごしたり、1人で本やらマンガやらを読んだりして、のんびりと過ごしていたっけなでも、そんな日々は高校3年目に一変した。特に受験と卒業が近づくと、クラスの緊張感は一気に高まった。

「今思えばオレ、あんなピリピリした環境でよくやってけたよな……」

ともかく、オレは数週間前に無事に高校を卒業。進学先の大学も決まった。遅いながらも、今年も自由な春休みを謳歌……しているハズだった。

でも……

「……『3日後には下宿先でしょ』か。明日は家具の引っ越しだし……」

受験終了直後にこんなありさまだ。とてもものんびりした春休み、という状態じゃない。

不意に、ねーちゃんのキンキン声が脳裏によみがえる。

『これから一人暮らしなのに、ホントにやってけるの?』

「ホント昔からおせっかいだなあ……わざわざそんなこと言うなよ……」

オレはあと3日で、生まれてこの方18年間住み続けたこの家を出て、下宿暮らしを始める。通学には無理のある隣の県の大学に進学するからだ。そんなわけで、この春休みはのんびり過ごす暇もな

く、部屋の片付けやら、下宿の準備やらにいそしむ羽目になっている。『立つ鳥跡を濁さず』ってわけだ。

「しかしこの部屋の掃除……いつまでかかるんだろ……」

掃除作業のゴールが見えない。そりゃ3年間、ろくに掃除をしてなかったから、時間がかかるとは思ってたけど。さすがのオレも、朝から昼過ぎまでずーっと片づけをしてると、ウサもたまるっつもんだ。

「……ああもうっ！」

思わず振り上げたオレの拳が床を叩き、ドスッと音を立てる。

それが大きな間違いだった。

床に叩きつけられた拳は、オレの予想以上の衝撃を生み出したらしい。オレが「しまった」と思った瞬間にはもう、教科書の塔がぐらついていた。

く、崩れる！

塔が傾いていく。ただでさえ足の踏み場もない状態なのに、これ以上散らかると敵わない。オレは夢中で塔に手をのばす。

スローモーション。じれったい一瞬の後、オレの手が崩壊寸前の教科書の塔を支えた。よし！これで塔の崩壊は阻止できたぞ！

その瞬間だった。

ドサドサドサドサ……それは頭の上に滝のように落ちて来るプリント。

オレの伸ばした手は塔を支えるにとどまらず、勉強机にも届いてしまっていたらしい。奇跡のようなバランスで均衡を保っていた机の上のプリントたちは、オレの手が激突した衝撃であっけなく崩壊した。

プリントの滝がおさまると、勉強机の上はずいぶんすっきりした。代わりに、部屋にはプリントの海が現れていた。所々に小島のように教科書の塔やマンガタワーが頭を覗かせている。

さて、ここで問題。オレはどこから手をつければいいんでしょうか？

「とりあえずこっちはほったこう……気を取り直してクローゼットから片づけるか……」

オレは勉強机に背を向けて、クローゼットの取っ手に手をかけた。思い切って一気にクローゼットを引き開ける。

これも間違いだったらしい。

声を上げる暇も無く、オレは突如現れたガラクタの雪崩に飲み込まれた。

……もう、オレにどうしろって言うんだ。

1、喋る白ネコは跡を濁す(2)

机のまわりに散らばるプリントを海に例えるなら、クローゼットの中から溢れ出したゲーム機や服なんかのガラクタどもは堤防だろうか。プリント海の拡大を防ぐ堤防だ。

オレとしては、海も堤防も撤去したいんだけど。というか、海だけでも十分手に負えないのに、堤防まで出現するとは。状況は悪化するばかりだ。これじゃ掃除をしているのか、部屋を荒らしているのか自分でもわからない。

思わず深いため息が漏れた。もう独り言を言う元気もない。とはいえ、3日後には家を出る以上、片づけなくては。

「とりあえず、クローゼットの片づけ、片づけ……っ」と

オレはガラクタ堤防を乗り越え、クローゼットに近づいて――盛大にくしゃみをした。

「うえええ……すっげーホコリ……!」

自分のクローゼットながら、我慢の限界を超えるホコリの量だ。

とりあえず窓際へ撤退だ。鼻をかみ、2、3度深呼吸。新鮮な空気を十分に吸い込んで――オレは息を止めてクローゼットに首を突っ込んだ。

一度崩壊して、物が溢れ出したせいだろうか、クローゼットの中はわりとすっきりしている。(もちろん、クローゼットの外と比較してという条件付きで、だ)

「あれ……? これ……」

オレはクローゼットの奥の方から1つの段ボール箱を引っ張り出した。それはどこから見てもごく普通の段ボール箱だ。多分、スーパリーの「ご自由にお持ちください」コーナーから持ってきたんだろう。大きさは、幼稚園児が2人でお風呂ごっこができそうぐらい。

ふと目についたその段ボールにオレは……何か見覚えがある。

「もしかしてこれ……『ブラックホール』か？」

『ブラックホール』。

それは昔、オレがこの段ボール箱につけた名前だ。

捨てられないけど、普段は使わない物。捨てずに取っておかなければならない物。とりあえず見えない所に押しこめて置きたい物。そういったものを、オレはこのブラックホールに片づけている。まさに臭い物に蓋……といったかんじで。オレは普段、このブラックホールの存在には近づかないようにしている。というか、忘れたことにしている。あんまり直視したいものじゃないし。

とはいえ、これも片づけないと、きっと怒られるんだろうな。

オレは半ばヤケクソ気味にブラックホールの封印を解いた。

ブラックホールの中身は悲惨そのものだった。くしゃくしゃの文集。ぼろぼろのノート数冊。壊れたシャーペン。まだ使えそうなグローブ。子供用のスパイク。使いさしの絵筆。何のために捨てずにとつてあるのかわからない物ばかりが、ブラックホールの中でごちゃまぜになっている。もはや、そのままゴミ箱として使ってもいいかもしれない。

「こいつも整理しろって？……骨より心が折れそうだよ……」

オレは絶望的な気分でブラックホールに手を突っ込んだ。やけっぱちで適当に手に触れた物をひっぱりだす。

現れたのはシワシワのプリントの束だった。オレはシワをのぼしてプリントの束をめくり始めた。どうやら漢字テストの束らしい。問題の内容からして、小学生もしくは中学生の時のテストだろう。

「うあ、ひっでー点数ばっかだな」

10点満点中のテストで2点やら4点やら、残念な点数ばかりである。うーん、ヒドイ。そして、点数もヒドイが間違いい方もヒドイ。例えばコレ。『初雪』の読みを答えろ、という問題。オレの回答欄

には『しよせつ』としつかりとした濃い文字。……自信満々に書いてあるのが余計に恥ずかしい。

「あー……情けない……」

オレは逃げるようにそのテストを裏返した。

「あれ？ 何だこれ？」

『しよせつ』テストの裏に何か書いてある。テスト用紙の裏の隅に隠れるように書いてある文字の列。小さいがテストと同じような、しつかりした濃い文字だ。

「なになに……『ある日、ぼくの家に一匹のネコがやってきた』………？ なんだこりゃ？」

最初は日記かと思ったが、どうもそうじゃないらしい。最後まで読むと猛烈に恥ずかしくなった。コレ、オレが書いたのか？ ……オレのテストの裏にあるんだから、きっとそうなんだろうな。これだからガキの想像ってのは……。

恥ずかしさに我慢できなくなったオレは『しよせつ』テストを乱暴にブラックホールに突っ込んだ。

「イテッ」

断つとくけど、これはオレの独り言じゃない。だってオレ、どこも痛くないし。

じゃ、痛いのは誰だ？ さっきの声はどこから聞こえた？ 常識で考えると――

「ねーちゃんかな？」

今、この部屋にいるのはオレだけだ。つまり、この部屋で言葉を発するのは、オレとテレビぐらいしかないはず。しかもテレビは現在オフのままだ。と、いうことは、さっきの声はこの部屋の外から聞こえてきたことになる。

「まったく、ねーちゃんこそ静かにしろっての。さて片づけ、片づけ……」

オレは再びブラックホールに手を突っ込んで、適当に中を探り始めた。

漢字テスト……文集……絵筆……。ガサガサと大げさな音を立てながら、いろんなガラクタが見えたり隠れたりをくり返す。まるでかくれんぼをしているみたいだ、なんて思ってる――

「イテッ」

またあの声だ！ オレは反射的にブラックホールから手を引っこ抜いた。

「なんだっ？」

オレの独り言の声が上がっている。完全にビビってるぞ、オレ。でも、それもしやがないと思う。さっきと同じ声が、オレのブラックホールの中から聞こえてくるんだから。これは聞き間違いや、空耳なんかじゃない。こんな至近距離から聞こえてくるんだぞ。間違えようがないじゃないか。

この中に一体何が入ってるんだ！？ オレはそーっとブラックホールを覗きこもうと、腰を落とす。

突然、ガタガタと脅すような音を立ててブラックホールが震えだした。まるで中身が大暴れしているみたいだ。

「うわあああああああ！？」

オレは恥も外聞も捨てて大声で叫ぶと、ブラックホールから飛びのいた。

と、始まった時と同じように突然ブラックホールがピタリと動きを止めた。今まで大暴れしていたのがウソのようだ。

「……何なんだ………？」

オレはへっぴり腰でブラックホールに近づく。そして、再びブラックホールを覗きこもうとして――

「へぶっ!？」

オレは今まで出したことも無いようなうめき声を上げて、床にひっくり返った。

なにせ、白い毛の塊がいきなり顔面に直撃したんだぞ？ 鼻は痛いし、視界が白い毛で埋まって何も見えないし、動物臭いし、たまったものではない。

「全く、自分の書いたものを粗末に扱いきりではないか？」

偉そうな口調。ブラックホールから聞こえてきた、あの声だ。床にひっくり返ったオレの顔の上から聞こえてくる。

後頭部が痛い。鼻も痛い。顔じゅうに毛の塊が乗っかっていて息が苦しい。さっきから訳がわからないことばかり。いろんなことが重なって、オレはイライラしていた。

「何なんださっきからあああああ！」

オレは湧きあがってきたイライラを全部まとめて爆発させた。怒りの標的は顔面の毛の塊だ。オレは腕をのばして顔面の毛の塊を薙ぎ払った——つもりだった。

「ごふっ!？」

オレが拳を振るった瞬間、顔面から毛の塊は消えた。それはまさに一瞬の出来事。「しまった」と思う暇もなかった。オレの拳は毛の塊ではなく、オレの顔面に直撃してしまったのだ。

結果、オレは顔を手で覆って床の上で悶絶する羽目になった。もはや声をあげる元気もない。なにせさっきから二回連続で顔面に物が直撃しているんだから。

「たわけめ。いつからお前はそんな暴力少年になってしまったのだ？」

またあのエラそうな声が聞こえる。

「どうなんだ？ 玉村 たまむら 海人 カイト」

知らない声に、フルネームで呼ばれた。顔面はまだ痛いけど、声の主がどうしても気になる。オレは上半身を起こし、声のした方に顔を向けた。

とたんにオレは絶句した。

初雪のように真っ白でやわらかくてサラサラしている毛。すばしっこそうなスラリとした体。いたずらっ子みたいなキラキラした瞳。眼の前にいるのはどう見ても——

「ね……ネコ？」

かすれたオレの声が、荒れた部屋にかすかに響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080y/>

人生《ストーリー》は終わらないっ！ 1

2011年12月3日15時55分発行